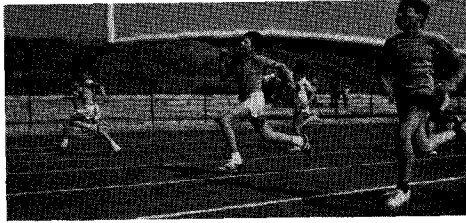




聖徒の道

5 1979



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スパンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
ヒュー・W・ピノック

教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

も く じ

神権の重要性	N・エルドン・タナー	1
アロン神権	オスカー・W・マッコンキー	4
青年の勇氣	ウェイン・B・リン	8
質疑応答	ドン・ノートン	12
本当のホームティーチングを 始めた日	ドン・B・センター	14
家庭経済	オルソン・スコット・カード	17
ぜんまいじかけの人間	シェリー・デビス	21
動物の食よく	チャーレン・A・シュラー	22
ロニー	デリア・K・ショア	24
うちゅうりょうこう		28
日の光栄の結婚	ブルース・R・マッコンキー	29
ノーヴーへの集合	グレン・M・レオナード	35
教会および世界史年表		43
ローカル・ニュース		44

聖徒の道 5月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA0573JA Printed in Japan

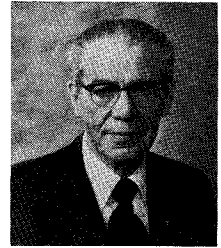
郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

神権の重要性

第一副管長

N・エルドン・タナー



神 権を持つということは、実に素晴らしい特権である。私たちは自分が神の霊の子供であることを知っている。私たちは、自分に授けられている神権の召しを全力を尽くして遂行するならば、限りなく進歩する可能性があることをよく認識する必要がある。

父親の助言

私が神権について初めて自覚したのは、執事に聖任される少し前であった。その時、ワード部の監督に召されていた父は、私に神権の大切さを教えてくれた。「神権を持つことを主が認めて下さるような人になってほしい。」そう言って、父は12歳の私を一人前の男性として扱ってくれたのであった。父は、神権を保持している若い男性に主が何を期待しておられるかを教えてくれた。主は、若い神権者が知恵の言葉を完全に守るように、またこれからあらゆる面で自分自身を道徳的に清く保つように望んでおられると教えてくれたのである。父はまた次のようにも話してくれた。「世の者となってはならない。授けられている神権を尊び、召しを全力を尽くして遂行するようにしなさい。模範となりなさい。神権者として雄々しく、ふさわしくなりなさい。どこにあっても正義を選びなさい。そうすれ

ばこの人生を歩んで行く時に、あなたに批判や嘲笑を浴びせ、あなたを支持しないと表明している人々からも、あなたは主から命じられたことを実行する神権者だとして、尊敬と信頼を得るようになるだろう。」

個人の責任

マッケイ大管長は高齢のために仕事を休まれるようになってから、私に何度か次のように言われたことがある。「教会員の集会に出席する時はいつでも、彼らに自分たちが何者であり、どのような行動を取らなければならないかを教え、そのことを思い出させるようにしていただきたい。しかもそれを行なう責任は各個人にあることを伝えていただきたい。」人は皆、どこにあっても福音の土台の上に立ち自分がその福音に対して証を持っていることを世の人々に知らせることができるようになる責任がある。それはつまり、夜女性とデートをしていても、大学で仲間と過ごしていても、あるいは魚釣りに出かけていても、どこにいても、福音に従って生活し、自分の信仰に従って行動する人間であることを人々に知らせようと決意することである。そうすればあなたは決して後悔することはない。

神権の重要性

私は、この神権がいかに重要であるかを皆さんに申し上げたい。主が神権を重要視されていたことは、この地上に神権を回復し、ご自分の教会を再び設立されたことを見ても明らかである。また神権を非常に重んじておられたので、バプテスマのヨハネを遣わして、アロン神権を回復された。バプテスマのヨハネは、かのふたりの若者を訪れた時に、自分はペテロ、ヤコブ、ヨハネより、彼らの指揮の下に遣わされたと告げている。バプテスマのヨハネの言葉を引用してみよう。「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫かなが主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。」(教義と聖約13章) この聖句からも神権がいかに大切であるかがわかる。アロンの神権は、天使の導きと恵み、悔い改めの福音および罪

を赦すための水に沈めるバプテスマの鍵を保有している。アロン神権を持つ若人はこれらの業を行なうことができる。アロン神権が回復されてからしばらくして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが訪れ、ふたりにメルケゼデク神権を授けた。この神権も非常に重要である。

教義と聖約には、神権の誓約について次のように記されている。「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。」(教義と聖約84:33) 何と素晴らしい約束であろうか。私たちがしなければならぬことは、主から託された召しを忠実に、全力を尽くして果たすことである。

きょう私の後ろの席にキンボール大管長が座っておられる。キンボール大管長は、今述べた神権の誓約を守ることにより肉体が再新された、偉大な模範である。大管長が喉頭がんの診断を受けた時の状態を、皆さんの中で果たしてどれだけの人が御存じかはわからない。キンボール大管長は手術によって声帯の



「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。」(教義と聖約第13章)

ほとんどを切除され、まったく話すことができなかつた。

私は、カナダでステーキ部長の職にあった時に出席した総大会のことを今も覚えている。その大会で、私はほかの2、3人の人と一緒にキンボール大管長にお会いする機会があった。キンボール大管長はその時、確か「こんにちは、タナー部長。お話したいのですが、声が出ないのですよ」と言われた。というよりもささやいたといった方がよいかも知れない。ただのどの奥でひゅーひゅーという音が聞こえるだけで、まったく話すことができなかつたのである。だれもキンボール大管長が再び声を取りもどせるとは思わなかつた。ところが、神権の祝福を受けることによって、キンボール大管長は声が出せるようになったのである。その後しばらくして、今から2、3年前になるが、声帯にがんが再発していることがわかり、医師から手術を勧められた。そこでキンボール大管長は神権者に、自分のために祈り、祝福し、灌油の儀式を執行してくれるように頼んだ。ここで注意していただきたいのは、キンボール大管長がお願いした相手は、神権者であるということである。それも、リー大管長だから、あるいは私だからというのではない。ただ私たちが神権を持っていたからである。こうしてキンボール大管長は神権の祝福を受け、手術を受ける必要がなくなった。

その後、キンボール大管長は一時心臓の状態が思わしくなくなったことがあった。キンボール大管長も許して下さると思うので、少しだけそのことについて述べておきたい。その時、キンボール大管長の心臓の状態は非常に悪く、大管長ご自身も何とかしなければならぬと思っていた。キンボール大管長の主治医ラッセル・ネルソン博士は、回復の見込みは5分5分であり、手術をしなければこの先長くないが、もし手術をすれば命を長らえる望みが大いに持てるということであった。

私たちはリー大管長の事務所で、しばらくの間、どうすべきか話し合った。そして最終的に、キンボール大管長は手術を受ける決意をされ、私もその決断が正しいと申し上げた。

それから、キンボール大管長は、リー大管長と私に癒しの儀式を求められた。その時ネルソン博士はこのように言っている「神の使徒であられる十二使徒評議員会の会長に手術を施すことは、本当に重大な責任です。今までで一番大きな責任です。」そしてこう付け加えた。「キンボール会長は2回手術を受けることになります。」

この年齢で2度の心臓手術を受けた人は、あとにも先にもキンボール大管長おひとりではないかと私は思う。ネルソン博士はこう言った。「キンボール会長をお助けするため主の導きによって手術ができるように私は神権の祝福を受けたいと思います。」

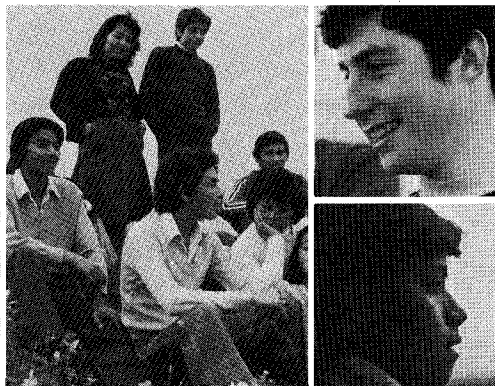
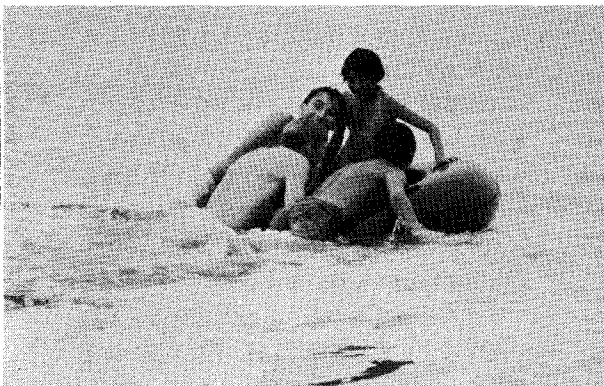
さて、兄弟の皆さん、あなたにとって神権は意味あるものとなっているだろうか。神権は、授けられている神権にふさわしい生活をしない限り、あなたにとって何の意味もない。したがって、12歳の少年であれ、70歳の老人であれ、神権者はどこにいてもふさわしい生活をしなければならない。神権を尊びなさい。あなたが神権を授けられていることを主に感謝し、朝に夕に毎日、主があなたに望んでおられることを行なう決意であることを祈りの中で主に伝えなさい。主のみこころを行なうならば、あなたは幸福になり、さらに成功を収め、また愛し尊敬されるであろう。そして何よりも、主はそのようなあなたをお喜びになるであろう。

この世で幸福と成功を勝ち得、将来主のみに帰ることができるように、ふさわしい生活を送るようにしていただきたい。イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈るものである。アーメン。

アロン神権



オスカー・W・マッコンキー
(*Aaronic Priesthood*「アロン神権」
より抜粋)



神は全能の御方であり、あらゆる権能を有しておられる。復活した主は、御自身が全能であることを証して、次のように言われた。「わたしは、天においても地においても、いっさいの権能を授けられた。」(マタイ28:18)

神は恵みにより、私たちに神のみ業を行なう権能を授けて下さる。そうして初めて私たちは神の権威と権能を持つことができるのである。

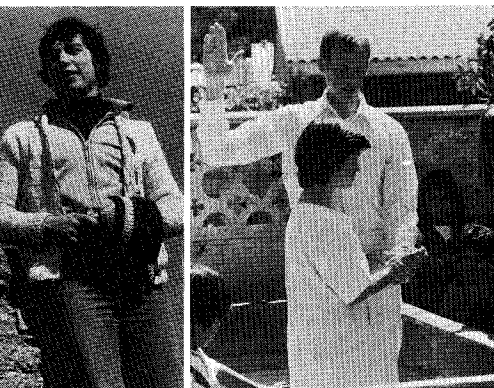
使徒パウロは、「だれでもこの栄誉ある務を自分で得るのではなく……神の召しによって受けるのである」(へブル5:4)と述べている。つまり、神は御自身の良しとされる人を召して、権能を託されるのである。人間はこの権能を、呪文を唱えて得ることはできないし、自力で受けることもできない。これは神

の賜である。主は、時の絶頂の時代に弟子たちに神の権威と権能を授け、次のように言明なさった。「あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだのである。……それは……あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。」(ヨハネ15:16)主から召された時にそれを受け入れる人は、神の恵みを受ける者となるのである。

今日、私たちは神権のことをよく理解しており、また実際にそれを授かっている。これは予言者ジョセフ・スミスのお陰である。予言者は次のように述べている。「神権は永遠の原則である。生命の始めなく^{いのち}齡の終わりなく、神と共に永遠の過去から永遠の未来にわたり存在する。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 157)

アダムを初めとする多くの人々は、「世が形造られる前に、創世にあたって」（同上p. 157）神権を授けられていた。アルマは次のように述べている。「神の聖なる神権の大神権に任ぜられた」人々は、神権の祝福と力を享受するために「神の先見の明によって創世の前からすでに選んで備えておかれた。」（アルマ13：3, 6）

神権は神の永遠の力と権能であり、万物は



この神権により創造され、今も支配されている。神権は、この地上で人類の救いに関するすべての事柄を執り行なうために、人に授けられた権威と権能である。天地の万物は、神権の権威と権能によって支配されているのである。

神権は人に利益と恩恵をもたらすために神から授けられている。神はアブラハムにこう言われた。「われ汝を大いなる国民となし、汝を限りなく恵み、汝の名をすべての国民の中に大いならしめ、汝は汝の末の子孫にとり祝福の基となりて、汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と権能とを携えて行かん。われ万国の民を汝の名によりて祝福せん。…また汝（すなわち汝の神権）により……世界の眷族ことごとく祝福を得ん……。」（アブラハム2：9—11）

それでは世の人々は神権を通してどのよう

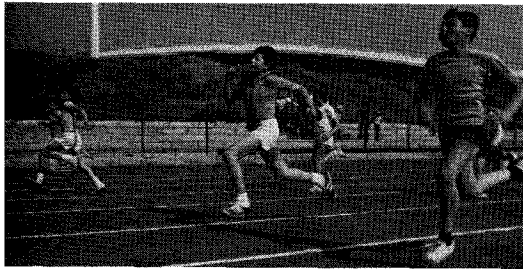
に祝福を受けるのであろうか。福音の祝福を通してである。神権者が福音の儀式を執行する時、それはまさに、救いの祝福を世の人々にもたらしているのである。

ワード部のアロン神権の会長である監督は、そのワード部の地域内で行なわれるバプテスマの鍵を握っている。自分で責任のとれる能力のあるすべての人は、神の王国に入るためにバプテスマを受けなければならない。（ヨハネ3：3—7参照）したがって、監督はその地域内に住むすべての人々の救いの鍵を握っていることになる。近代の聖典に、神権は「福音を授け」と記されている。（教義と聖約84：17—19参照）

使徒パウロは、ヘブル人に宛てた手紙の中で神権について詳しく語り、神権者を「天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち」（ヘブル3：1）と呼んでいる。また、この聖なる神権の職に召された人々は神の息子たちと呼ばれ、「神に仕える役に任じられた者である」（ヘブル5：1）と述べている。しかし、ここで最も重要なことは、パウロが、「私たちが告白する信仰の使者また大祭司なるイエスを、思いみるべきである」（ヘブル3：1）と言って、イエス・キリスト御自身も聖なる神権に召されたことを教えていることである。イエスは「神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである。」（ヘブル5：10）

救いに関するすべての事柄でイエスは完全な模範であった。イエスは自らバプテスマを受けられた。同じように私たちもバプテスマを受けなければならない。（ヨハネ3：5；Ⅱニーファイ31：12—21参照）イエスは完き救いを可能にするために聖なる神権をお受けになった。同じようにイエスの後継者となる人人も聖なる神権を受けなければならないのである。（教義と聖約107：5, 8, 18—19参照）

神は唯おひとりであり、神の権能も唯ひとつであるなら、神権も唯ひとつのはずである。それこそ「神の御子の神権の聖なる神権」(教義と聖約107:3)である。「されど、至高者いとたかきものの御名を敬い尊ぶあまりしばしば御名を繰返し唱うることを畏れて、古えの教会員はこれをメルケゼデクの神権またはメルケゼデク神権と称えた。」(教義と聖約107:4)このことからわかるように、ヘブル人への手紙の中で、しばしば繰り返されているのはメルケゼデク



神権のことである。予言者ジョセフ・スミスは、「すべての神権はメルケゼデクである。しかし、これには異なった部分、階級がある」(Teachings of the Prophet Joseph Smith「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 180)と教えている。

末日聖徒イエス・キリスト教会には、ふたつの神権、すなわちメルケゼデク神権とアロン神権とがある。アロン神権はメルケゼデク神権に従属する。言葉を換えて言えば、メルケゼデク神権はアロン神権が行使するすべての権威と権能を内含する。聖典には次のように記されている。「当教会に二つの神権あり。すなわちメルケゼデク神権とレビ神権を含めるアロン神権なり。」(教義と聖約107:1)予言者ジョセフ・スミスは、「メルケゼデク神権は、アロン神権もしくはレビ神権を内包する」(Teachings of the Prophet Joseph Smith「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 166)と述べ

ている。

アロン神権

アロン神権は大いなる権威と力を持つ神権である。この神権は、大神権となえメルケゼデク神権に従属するので小神権となえられる。(教義と聖約107:13—14参照)「小神権」という表現は、決してこの神権を軽んじているわけではない。神の完全な権能と比べて小さいからである。アロン神権は神がこの世で人に委任された権威と権能の一部であり、人間社会の政治組織や軍隊よりも偉大な力を有する。

アロンの神権は、救いに必要な「外形的儀式を執り行う権能を有」する。(教義と聖約107:13—14参照)この聖なる神権を授けられた人は、「天父と御子と聖霊との御名に由りて」(教義と聖約20:73)バプテスマを施す権能が与えられ、正統な執行者となる。神はこのアロン神権を持つ人々に、神に代わってそのみ業を行なう権限を授けておられるからである。

アロンの神権はまた「悔い改めの福音……の鍵を握る神権」(教義と聖約13章)である。人々に福音を受け入れる準備をさせることから準備の神権とも言われる。時にはイエス・キリストの先駆者エライヤスにちなんで、エライヤスの神権と呼ばれることもある。悔い改めは、人が神を知る備えをなす鍵である。したがって、アロン神権は悔い改めの福音の鍵を握る神権でもある。

またアロンの神権は、「罪を赦すために水に沈むるバプテスマ……の鍵を」(教義と聖約13章)握っている。救いに欠かせない儀式であるバプテスマを施す権能はこのアロン神権に含まれる。(ヨハネ3:5参照)このように、アロン神権は救いの道を開くものである。祭司

の義務はバプテスマを施すことである。(教義と聖約20：46参照)

またアロンの神権は「天使の導きと恵み…の鍵」(教義と聖約13章)を握る。つまり、この神の権能を持つ忠実な神権者は、神のみ使い、天使の訪れの扉を開く鍵を有するのである。

正義を推し進めると同時に、この準備の福音を教え、広めるのは、アロン神権者の責任である。祭司の義務は説き、教え、釈き、勧めることである。(教義と聖約20：46参照)

アロン神権者は「聖餐式を執り行なう」(教義と聖約20：46)こともできる。また「常に教会員を守護し、彼らと共にありて彼らを強くすべきものとす。また教会員の中に邪曲なきよう……注意すべきものとす。また……集会を指導すべきなり。」(教義と聖約20：53—54, 56)「祭司、教師または執事はことごとく各々に賜わる神の賜と召とによりてその職に按手聖任せらる。」(教義と聖約20：60)

この神権を持つ者は、教会の基本的な教育プログラムに参加する責任がある。つまり「各会員の家庭を訪れ、彼らが声を挙げてみそかにも祈りをなし、またすべて家庭の務めにいそむように」(教義と聖約20：47)勧めなければならないのである。

アロンは、彼の名にちなんで呼ばれた神権を最初に管理した人であった。彼は「神の召しによって」(ヘブル5：4)神の権能を伴うこの地位を与えられた。主は、準備の福音として肉につける戒めの律法を民に与えられた時、同時にこの低い律法を管理する神権の権能も授けられた。(ヘブル7：12)

のちにアロン神権は、レビ族のほとんどすべての男性に与えられた。そのため、この神権時代においては、アロン神権はレビ神権とも呼ばれている。(教義と聖約107：1, 6, 10

参照)

古代のアロン神権者は数多くの儀式と務めを果たしていた。それらはみな律法の書(出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)に詳しく記されている。使徒パウロは、これらの多くの義務は「種々の洗いごとに関する行事であって……肉の規定にすぎない」(ヘブル9：10)と述べた。また、「数々の規定から成っている戒めの律法」(エペソ2：15)であると記している。

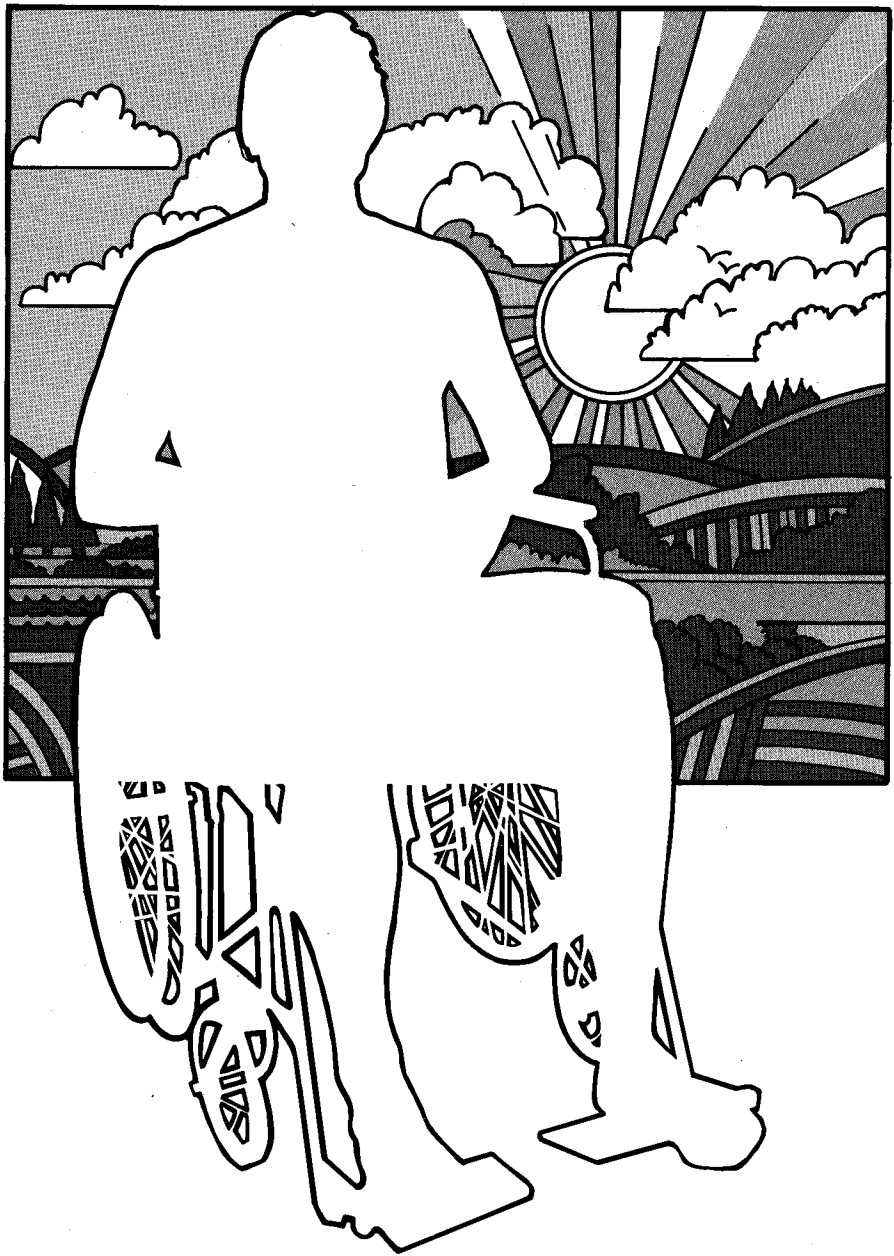
これら数多くの儀式の目的は、気ままな民を教化し、彼らにイスラエルの聖者を受け入れる備えをさせることであつた。

神権にかかわることはすべて、人々の心を神に向け、永遠の生命に至る道を歩ませるといふ目的を持っている。

主が神の権威と権能である神権を用いられるのは、この目的を達成するためである。主はモーセにその第一の目的を明らかにされた。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)つまり、神権の目的とは、人類を救い、人に究極の祝福をもたらす神のみ業を達成することにある。

イエス・キリストの福音は、悪人を善人に善人をさらに善い人間に変える。神権は人の霊を高め、気高い性格を養う。そして、「福音を授け、また王国の奥義の鍵、すなわち神の知識の鍵を保つ」(教義と聖約84：19)のである。さらに主は言われた。「またすべてこの神権を受け入る者は、われを受くるなり。」(教義と聖約84：35)

神権の召しを全力を尽くして遂行するならば、神が有しておられるすべてのものを、神はその子供たちに与えると約束しておられるのである。



青年の勇氣

ウエイン・B・リン

車 椅子のその若者は、前の年に見た姿と驚くほど変わっていた。私が覚えている彼は、強靱^{ヒカ}な足でバスケット・コートを走り回っていた、18歳の明るいインディアン青年であった。それが今は車椅子の世話になっている。しかし彼の黒く澄んだ眼と美しい笑顔を見た時、この若者の勇氣に私は敬服してしまった。

私が初めてドンという青年に会ったのは、2年ほど前のことである。その時、彼が改宗者であることを知った。彼の母親は夫に先立たれ、ひとりで遠くのナバホインディアン居留地に住んでいた。そしてドンは、インディアン学生里親制度の恩恵を受けて学校に通っていた。学校の成績は抜群で、ピアノやギターもうまく、そのしなやかな指で絵を描かせれば、見事な絵を描く。よくギターをつまびきながら透んだ声で歌っていた。性格は明るく、道徳の標準も高く、証は強かった。彼は高校を卒業したら、しばらく居留地の人々の所に帰り、それからもう一度里親の所へもどって、伝道の召しを受ける準備をしたいと考えていた。

人生には、たとえどんなに入念な計画を立てても、それを変更せざるを得ないような事態が生じるものである。しかし、ドンの将来に、これほどの大事が待ち受けていようとはだれも予想しなかった。一瞬の痛ましい出来事によって、居留地で楽しく過ごすはずの日々は消えてしまった。そして彼は、だれも予期しなかった形で伝道することになったのである。

ある日のことである。ドンは友人たちと小型トラックの荷台に乗っていた。その時、あ

まった。そしてそのまま気を失い、気が付いた時は病院のベッドの上にあった。体中ひどい痛みであった。

背中^{ウシ}は耐えがたい痛みが一晩中続き、翌朝には、手足が動かなくなってしまった。首から下が完全に麻痺していた。

そこですぐに手術が行なわれた。そしてドンが次に回復室で目覚めた時には、背中の痛みだけは幾分和らいでいた。しかし手足を動かそうとしても何の反応もなかった。

ドンの担当医は、病状の好転はまず望めないと診断していた。ドンは病院のベッドにじっと横たわって落胆の涙と懸命に戦っていた。そして自分の思いを天父に打ち明け、この苦しみに打ち勝つ力と、みこころならば回復するようにと願った。

ドンは人々が寝静まると毎晩のように、わき腹のそばに無造作に投げ出された自分の手を動かそうと、暗闇の中で何時間も苦闘した。祈っては試し、試しては祈り、「できる、自分にはできる、できるんだ」と心の中で何度も繰り返した。そして朝の柔らかな光が窓のブラインドを通して射し込む頃、ようやく疲れた身を慈悲深い眠りの手にゆだねるのであった。

そんなある日の夜、ドンの心は喜びに躍った。手の指のひとつがかすかに動いたのである。彼は息を凝らして、もう一度そっと指を動かしてみた。

その夜、ドンは一睡もできなかった。胸躍る期待感に不安な心はかき消され、回復の新たな望みがよみがえってきた。

非常な努力と忍耐により、毎晩新しい力がよみがえり、両手両腕の機能は少しずつもどってきた。

それまで、ドン主治医は、この若者に手足の麻痺という現実を受け入れるように告げることをちゅうちょしていた。

そしてやっとの思いで、医師はそのことをドンに告げた。医者にとってこれほどつらいことはなかった。ドン主治医は気持ちを抑えて、足速に部屋を出て行こうとした。そして、ベッドに横たわっているドンの方をちらっと見た。するとその時、ドンは頭のところにあるベッドの手すりに手を伸ばし、体を引っ張って楽な姿勢をとろうとしたのである。驚いた医師は我を忘れて叫んだ。「もう一度、ドン！ そうだ。もう一度やってみなさい！」間もなく、何事かとかけつけた看護婦や医師で病室は一杯になった。それは、まさに記念すべき日であった。

ドンは腕と手に、少しずつではあるが、力がよみがえってくるのを感じ、うれしくてたまらなかった。しかし動かない足にひとたび目を転じれば、涙がこみ上げ、悲しくなってしまうのである。

そんな苦しい境遇の中にあっても、彼は伝道の精神を失わず、その望みをかなえようと努めた。そして同室の少年にモルモン経のことを話し、モルモン経をプレゼントした。ポピンディアンのチャールズ少年はすぐに本に夢中になり、夕方日が沈み、辺りが暗くなってもまだ読み続けた。彼は、食べる時間や寝る時間も惜しんで、3日2晩、読書に没頭し、とうとう最後まで読み上げてしまった。そしてドンのそばに来て、こう尋ねた。「ドン、君はどこでこの本を手に入れたの？。ぼくらの部族には神聖な言い伝えが残っているんだけど、それと同じことがこの本には沢山書かれているんだ。どこで、この本を見つけた

の？」

ドンは早速この新しい友達に証を述べ、福音が回復されたことと、自分たちはモルモン経の民、誓約の民レーマン人の子孫であり、それには特別な意味があることを伝えた。

それから間もなくして、チャールズはこの教えを家族や友達にぜひ教えたいと言って、退院して行った。ドンはコロラド州デンバーのリハビリテーション・センターに移された。そこでの患者たちの様子に、面くらってしまった。みんな意気消沈し、落胆、失望しているのである。患者たちは、同じ苦しい目に遭っているドンがどうしてこんなに幸せでいられるのかわからなかった。「どうして君はいつもそんなににこにここと幸せそうなんですか。」ドンは答えた。「にこにこしていれば、涙も出てこないし、笑っていれば、悲しいことも消えてしまいますからね。」

ドンは勇気をもって、特別な治療を受けることにした。他の人々が飽きてやめてしまった後も、ドンは遅くまで運動場に残留して、練習を繰り返した。このような努力と天父に対する謙遜な祈りによって、ドンはついにひとりて棒を上り下りする力がつき、歩行器や松葉づえを使って歩けるようになった。運動機能が伸びると同時に、教会の礼拝行事にも出席できるようになった。この霊的な慰めは彼に大きな喜びをもたらした。しかし驚いたのは病院に帰った時の仲間の態度である。みんなは、教会に行っているということで、ドンをからかった。けれども、そういう嘲笑にドンは持ち前の笑顔で応えたのであった。彼は自分の新しい住まいであるその病院の陰気な雰囲気はどうにかしたいと思い、早速伝道の第2段階に取りかかった。

その後、毎日のように、車椅子で廊下や部屋を回って福音を説いているドンの姿が見られた。彼は「予言者さん」という愛称で呼ばれるようになり、彼自身もそれを快く受け入れていた。

夜になると、しばしばギターを弾きながら歌を歌った。まわりの人々もそれに加わって、和やかなムードが広がった。間もなく毎週金曜日の夜に、演奏会が開かれるようになり、患者たちは皆そこに集まって歌や笑いに興じるようになった。患者たちは次第に笑顔を取りもどし、お互いに愛称で呼び合う仲間になった。

そんなドンにも心から喜べないことがあった。ドンは一日も早く、家に帰りたかった。そして家族や友達に会いたかったのである。しかしふと自分ではどうすることもできない両足を見ると、そんな願いも曇ってくるのであった。そんな時はいつも素晴らしい教会員たちの助けがあった。ドンは次のように述べている。「彼らの親切のお陰で、私はいつも笑顔絶やさず口元に笑みを浮かべることが出来ます。」

退院の日が近づくと、友人や家族が自分をどう迎えてくれるか、ドンは心配になった。

やがて里親がやって来た。こんなことを聞くのはドンにとってもつらいことだったが、それでも勇気を奮って尋ねてみた。「また、家に帰っていいですか？」ドンは心配だった。「もちろんだよ、ドン。みんなでベッドを用意して待っているんだよ」と優しい返事が返ってきた。その心の込もった言葉に胸が一杯になり、思わず涙が込み上げてきて止めることができなかった。そして、みんなと共に喜びと愛の涙にくれたのである。

ドンが退院する晩、彼の送別会が開かれた。

新しい友達も大勢加わってドンをたたえ、天井を揺るがすような声で「ここには酋長は多いがインディアンは足りぬ」という歌を歌ってくれた。

この青年の思いと勇氣は人々の生活を変え、その心に忘れがたい印象を残した。

その時にドンを見送った2名の患者と2名の看護婦が、彼のお陰でイエス・キリストの福音を受け入れた。そのほか大勢の人が将来に新たな希望を見だし、だれもがいなくなったドンを懐かしんだ。

ドンが帰宅すると、大勢の友達が出迎え、歓迎してくれた。すぐにLDSメールボックス書店の仕事も見つかり、その収入で特別な運転装置の付いた車を購入することができた。そしてその車で通勤やメーサ・コミュニティーカレッジへの通学ができるようになった。

訪問を終えて帰ろうとする私に、彼は一通の手紙を手渡した。「これは何ですか。」「デンバーのお医者さんからの手紙です。」彼は笑顔で答えた。

私は手紙を開いて読み始めた。「親愛なるドンへ。どんなに感謝の気持ちで述べたいかわかりません。きのう私は生涯最良の日を迎えることができました。パプテスマを受けて、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になったのです。」

私はドンが示してくれた模範を大切にしていきたいと思う。別れ際に彼が言った言葉を、私は決して忘れない。私が彼の将来について尋ねると、私をまっすぐ見つめ、確信を持って彼はこう答えたのである。「涙をぬぐい、失意の風を吹き飛ばし、胸をはって生きていきます。負けられません。だって、神さまがついて下さるんですから。」

私は1966年に教会に入ってからずっとホームティーチャーとして働いてきた。しかし本当のホームティーチングのあり方がわかったのはつい数カ月前のことである。これまで何人も同僚が変わった。そして私たちはいつも、担当家族の状況に気を配り、誕生日や記念日、そのほか個人にとって大切な事柄を覚えて、家族と良い関係を築くように努めてきた。毎月それぞれの家庭の必要に合わせて霊的なメッセージやレッスンを携えて行った。

また、家庭の夕べを開き、家族の祈りをするように、また教会の集会にも定期的に出席するように、家族を励ましてきた。

ところがある晩、家族を訪問していた時に、何となく心の中に不安な気持ちが生じてきた。相手と親しく交わり、霊的に高めていこうという姿勢は前と変わっていない。一見何も問題は無いようである。だが、何かがうまくいっていないと感じた。同僚も担当家族も楽しそうで、私の心の動揺に気がつかない。当の

本当のホームティーチングを始めた日

ドン・B・センター



本人でさえ、その不満感が何であるかつかめなかった。しかし、確かに何かがあまくっていない。私はホームティーチャーとしての召しを十分に果たしていないと思った。

一体どうしてなのだろうか。私はふたつの長老定員会の会長会で働いてきて、ホームティーチングの行ない方はよく承知していた。担当家族に信頼され、彼らの気持ちや問題や希望などを安心して打ち明けてもらっていた。私たちが家族の一人一人が家庭や教会、社会にとって必要な価値ある人であると思っていた。また、言葉でも行ないでも、みたまの導きに従おうと努めてきた。それなのに、何が足りないというのであろうか。

その週の木曜日の夜、最後に訪問した家族の家でおいとましようとして席を立った時、ある思いが私の頭に浮かんできた。同僚はいつものように訪問の最後に告げる言葉を述べていた。「何か、お手伝いできることはありませんか。」返ってくる言葉も決まっていた。「いいえ、何もございません。大丈夫です。」その時ふと、救い主の言葉が浮かんできた。「祈る時に……空しき言葉をくり返すなかれ。」(IIIニ一フェイ13:7)

空しき言葉！私たちのしていたことはまさしくそれであった。その夜、私は同僚を家まで送って行く途中、それぞれの担当家族に実際にどんな助けが必要かを考えてみた。例えば、ロバートソン兄弟姉妹は教会に活発な若夫婦であるが、「まだふたりきり」だということで、家族の祈りも家庭の夕べもしていなかった。私たちはそのことについてレッスンを行ない、励ましたが、効果はあがっていなかった。彼らには私たちの助けは必要ないのだろうか。

パワーズ姉妹は、ゲリーという11歳の息子を持つ未亡人である。必ずや何か助けが必要なのはである。

ダブ兄弟はどうだろう。彼は卒中が原因で車椅子の生活である。彼と、教会員でない奥さんのグラディス姉妹は、私たちの助けを必

要としていないのだろうか。

離婚した30代のショー姉妹も、いつもは明るく元気はつらつとしている。けれども、何か助けを必要としているに違いない。

私たちは訪問した時にいつも助けることは何かないか尋ねているではないか。どこか間違っているのだろうか。同僚と私は、その夜別れる時にもっとよいホームティーチングができるように改善してゆかなければならないことを確認し合った。

それから2週間、同僚と私は何度か会って、担当家族に必要なと思われることについて話し合った。そして特別な注意がいて感じたことを書き出した。そして、次の訪問ではこれまでと違う方法で話しかけてみることにした。ロバートソン兄弟姉妹には、「何か、お手伝いできることはありませんか」ではなく、「来週の木曜日、私の家で家庭の夕べを一緒にしませんか」と誘った。パワーズ姉妹には、「ゲリー君を土曜日のフットボールの試合に連れて行ってもいいですか」と尋ねた。ダブ兄弟には、「長老定員会のサンダース兄弟はとても器用なんですよ。お宅の居間の壊れた椅子を彼に直してもらってもいいですか」と尋ねた。また、ショー姉妹には「うちの妻が、今週扶助協会にご一緒したいと言っていました。いかがですか」と尋ねた。すると驚いたことに、皆さん口をそろえて、「はい、お願いします」という返事であった。

それからの数カ月間で、私たちはこのホームティーチングの新しい方法から幾つかの基本原則を学ぶことができた。その原則には個々の家族に必要なことを理解する上で欠くことのできない事柄が含まれている。

1. 知覚を働かす。家族をよく見直し、手伝えることがないかどうかを知る。家族の中で仕事を捜している人はいないだろうか。ガレージのペンキ塗りや家の掃除の助けは要らないだろうか。十代の子供を理解できなくて困ってはいないだろうか。物質的に、あるいは健康面で困っていることはないだろうか。

問題を見過ごしにしてはいないだろうか。お年寄、青少年、小さい子供を抱えた親たち、そのほか問題も含めて共通の話題は数多くあるはずである。具体的な問題を見つけることが大切である。家庭はぎくしゃくしていないだろうか。放任、あるいは厳格すぎではないだろうか。家族のみんなはのびのびと話し合っているだろうか。家庭に本当のコミュニケーションがあるだろうか。信頼はあるだろうか。相互理解は？家族は心の平安と満足を得ているだろうか。霊的に高められ、満たされているだろうか。人々が必要としていることを、知覚を働かせて知ることが必要である。

2. 敏感になる。助けが必要でも頼みにくく、断わってしまうことがよくある。したがって、気をきかせ、援助を買って出ることが大切である。しかし強要しないようにする。申し出が友情から出たものであり、相手を見下したりあてつけたりせず、真心から話すならばうまくゆくはずである。自分の態度に気を付けるようにする。

3. 想像力を豊かに働かせる。家族全員の大

切な日を覚えておくのはもちろん大切であるが、そのほかにもあなた自身の気持ちを伝えるカードや手紙を出してはどうだろうか。あるいは、その家族が自分にとって大切だということ伝えるために、心のこもった手製のプレゼントを作って贈ってはどうだろうか。担当の全家族を招いて、家族交流を図るためのピクニックやパーティーを行なうことも楽しいはずである。家族の必要に合わせて独創性のある計画を立てるとよい。

4. 具体性のある問いかけをする。「何かお助けできることはありませんか」、「何か必要なことはございませんか」と問いかけるのではなく、「水曜日の4時に、ゲリー君を初等協会にお連れしていいですか」とか、「家庭の夕べの大切さについて説明している映画があるので、それをお見せしたいのですが、よろしいでしょうか」と尋ねる。質問が具体的にできれば、それだけ返事をする方もしやすくなってくる。

これらの原則はホームティーチャーに対する指示ではない。むしろ指示に付随するものである。私たちはこの新しい方法を続けてきて、成功したり、また時には失敗したりした。しかし今、自分たちは主に喜ばれる方法でホームティーチングをしているという確信を持っている。そして自分たちの満足だけでなく、担当家族が霊的に成長していることを見ても、私たちの働きが無駄ではなかったことを知ることができた。

先日、聖餐会の後でロバートソン兄弟姉妹が私のところへ来て、家族の祈りと家庭の夕べを始めてから、ますます幸せを感じるようになったと心から証して下さった。そういう実りを知るたびに自分たちは正しい方法をとっているのだという確信を深めることができる。ホームティーチングを正しく活用するならば、それはホームティーチャーと家族の双方に祝福をもたらす手段となるはずである。

ドン・B・センター、日曜学校教師、セミナー・インスティテュート非常勤教師。



家庭経済

オルソン・スコット・カード

財政上の問題を上手に処理している夫婦も多いが、逆にその問題でどうしようもない泥沼にはまり込んでいる夫婦も時折見かける。

私は大勢の末日聖徒の夫婦を面接してあるひとつの結論に達した。それは、金銭の上手な管理ですべてに適合できる方法などないということである。ここで取り上げた例はすべ

て合衆国のものであるが、どの国の聖徒にも大なり小なり当てはまると思う。

しかも、そのことは大金持ちであろうが、貧しい人であろうが、大した違いはないのである。経済上の問題は、金持ちにも金持ちでない人にも同じように存在する。

それでは、財政上の問題を上手に処理している人と、そうでない人との違いは、どこに



あるのだろうか。上手に処理している夫婦には幾つか共通点がある。夫婦間の話し合いがうまくいっている、無理のない望み、予算計画、借金をしない、というようなことである。

夫婦間の話し合い

夫婦の両方が金銭の使いみちを知っていれば、財布を預かるのがどちらであろうと問題ではない。しかし、どちらか一方が金銭の使いみちに不信を抱き始めると、問題が生じてくる。

アール・ルーチェ兄弟姉妹は次のように述べている。「私たちは大きな買い物をする時は、必ず事前に話し合うようにしています。子供に関係があることは子供と一緒に話し合います。ピアノが欲しいという時に、私たちは子供たちを連れてピアノを見に行きました。そしてみんなで話し合い、家族全員でどれを買うかを決めたのです。その結果、子供たちもお金の節約に進んで協力してくれました。」

関係ある人全員が納得し合った上での決定だとみんなが感じられるようにすることが非常に大切であるように思われる。そして夫婦のどちらか一方が独断で決めるようになると、問題が起きてくる。

ある女性はこう言っている。「私は経済的なことで意見を聞かれたことがありませんでした。夫が何から何まですべて決めていたんです。ところが、私の知らないうちに破産寸前になっているではありませんか。私は本当に驚いてしまいました。」この場合、夫は単純に財政管理は男の仕事であると思込んでいた。しかし金銭の扱いが上手ではなかった。妻もそうである。そこでふたりは相談し、妻が家計簿をつけて、購入や支払いについてはふたりでよく話し合うことにした。こうしてふたりは知恵を出し合い、節約し合って、家計を

立て直したのである。

ケイ・クリステンセン夫妻はこう言っている。「ただひとつよくないことは、『これは私のお金だから、私の好きなように使いたい』という考えです。夫であれ、妻であれ、どちらが得た収入であっても、お金はすべてふたりの共有でなければなりません。」

また、買う前によく話し合うことによって、「衝動買い」を避けることができる。

夫婦がよく話し合ったからといって必ずしも経済上の問題がまったく起こらないということではないが、窮地に陥った時に夫婦の一方がショックを受けたり、恨んだりということがないのは確かである。

無理のない望み

時折、夫婦の一方あるいは双方がお金の価値を知らないことがある。結婚当初は、何らかの犠牲が要求されるということがわかっていないのである。夫が在学中の場合もある。またたとえ学業を終了しても、当分は低い給料で我慢しなければならないということもある。

米国南部に住むある監督はこう語っている。「什分の一を納めるお金もなく、毎日の食べ物にも事欠く人々とよく話をするのですが、そういう人々に限って先月はボートを買ったとか、何かをしたいとかいうのです。彼らは自分の収入が実際いくらあるのか、よく知る必要があると思います。裕福なお隣りが何を買ったから自分たちも買おうという考えをなくしてもらいたいと思うのです。自分自身の生活をよくわきまえて他人の生活に惑わされないように、彼らを説得するよい方法はないものでしょうか。」

予算計画

家族の経済状態をうまく保つ鍵は、まず生

活必需品の購入予算を組み、そして余りがあればそれを効果的に使うということにあるように思われる。

財政管理の上手な夫婦は大きな買い物をする前に、あらかじめ1年の予算を立て、大きな支払いがあれば、それが家計にどう響いてくるかを正確に把握している。

予算計画の中で大切なことは、支出の詳細を正確に書き出すことである。予算が実際に役立つものとなるためには、大きな支出だけでなく、食事や車の修理代などを含めた必要経費をすべて、把握しておくことが大切である。

それでも問題は起こってくる。例えば、医療費や突然の財産課税、保険料の大幅な値上げや家族の危急な問題など、予測もつかない事態に遭遇することがある。しかし大抵の家族は計画を立てず、いつも非常時のような生活をしていて、支払うお金がないのはどうしてだろうかとその原因もわからないでいる。計画を立て、計画通りにお金を使っていれば、家族全員が少なくとも今自分たちはどんな経済状態にあるかがわかるはずである。

借金をしない

ロバート・レアード監督は、若い夫婦に自分の一と同時に貯金をすることを勧めている。「月々少額であっても、貯め続ければ大金になります。また貯金は予防にもなります。銀行に預金があれば、借金する気にもならないからです。」しかし、貯金をする本当の目的は、「危急の時のために十分なお金を取っておくことです。買物のために貯金するのはその次にくることです。」

初めてよい仕事に就いた時とか、給料が上がる時に、借金の誘惑が強くなることはだれもが認めていることである。それではそのよ

うな誘惑にどのように対処したらよいだろうか。まずそっくりそのまま、一度銀行へ預金することである。

しかし、借金も時には許される場合がある。キャロリン・グリーンはピアノが欲しかったが、すぐ買うお金がない。そこで、夫と一緒に計算してみた。するとピアノを何人かに教えれば、3年でローンを払い終えることがわかった。「それでも、万一の場合を考えて、最初の1年の支払い分は前もって貯めておきました。それからピアノを購入し、入ってくる月謝をローンの支払いに充てたのです。今は自分の子供たちに教えるだけですが、その分ピアノを習わせるお金もいりませんし、良い投資だったと今でも思っています。」

借金も時には財政管理の上で必要な場合もある。投資がその良い例である。それも購入するものが、グリーン家のピアノのように返済金を生み出すもの、また看板屋のトラックや秘書が使うタイプライターのように必需品の場合だけである。しかも、借金は計画通りに行かなくても返済しなければならぬので、失敗してもできるような価値の変動が少ないものを選ぶことが賢明である。また土地や建物や商売などに資本投資をするための借金は許されている。(ただし、投機に手を出すための借金は問題を起こしやすく、教会の指導者の勧告に反することが多いので注意を要する)

お金が問題ではない

ユタ州プロボに住むある若い夫婦は今、3人の子供を育てながら学校に通っている。その学生夫婦が私にこう言った。「私たちにはお金の問題などまったくありません。だってお金がないんですから。」それからまじめな顔をしてこう語った。「お金のことで口論はしないことにしています。いつも幸せであるように

と心掛けています。狭いアパートに住んでいるからって、どうして惨めになるのですか。狭ければ狭いほど、それだけ親密になれると思うんです。」

財政管理で苦勞する夫婦と苦勞しない夫婦の一番の違いは、気を持ち方であると思う。収入の多少に関係なく、家計を上手にやり繰りしている家族からは、よくこういう言葉が返ってくる。「物を持つということに、あまり気を使わないのです。そりゃあ、持つに越したことはないのですが、なくてもどうってことはありません。大切なのはお互いの心ですよ。」

こういう気持ちでいれば、どのような障害でも乗り越えることができるはずである。たとえ経済的な問題が生じても、一致協力することができる。そして、障害によってふたりの仲が引き裂かれるというようなことは起こらないであろう。

末日聖徒の家族を面接して知った財政管理の原則を次に要約してみた。

1. よく話し合う。夫婦は共に家庭の財政がどういう状態にあるか、よく知っていなければならない。小さな決定でもすべて知恵を出し合って決めるようにする。
2. 望みはほどほどに。お金はそう簡単に入ってくるものではない。特に結婚当初はそ

うである。夫も妻も独身の時のようにお金が使えると思ってはならない。

3. 予算を立てる。あらかじめ計画を立て、できるだけその予算計画に従う。お金の使い道を記録する。それでも予定外の支出や緊急時のために予算に幅を持たせておくことが大切である。
4. 借金をしないようにする。堅実な財政を維持するためには、物を買っておいて後払いにするという買い方は避けなければならない。投機買いの借金はしないこと。
5. どのようなものを得ようが、どのような問題が起きてこようが、一番大切なのは夫婦の関係であることを忘れない。金銭問題で夫婦仲にひびが入るようなことがあってはならない。

大抵の場合、収入がどれだけあればよいというものではなく、気持ちの問題である。家族が収入の範囲内で生活することに満足していれば、ほとんどの場合、それほど問題はないはずである。少なくとも幸せであればそれで十分である。

オルソン・スコット・カード：フリーランサー、記者。ソルトレーク・エミグレーションステータス部第21ワード部、福音の教義クラス教師

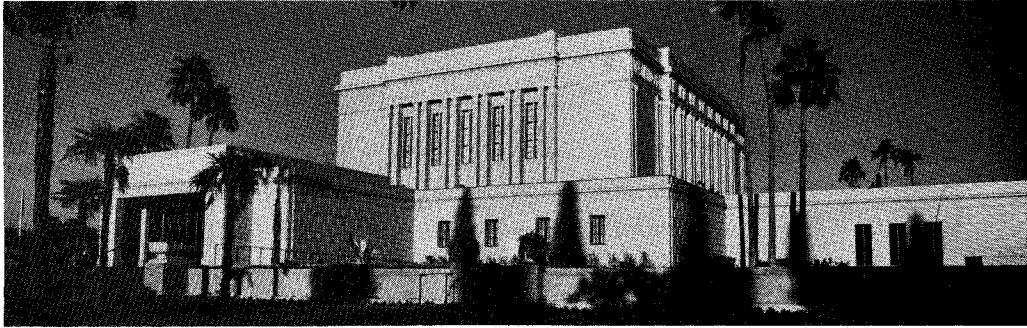


日の光栄の

結 婚

(その2)

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー



私たちが教会で行なうことはすべて、神が定められた永遠の結婚制度にかかわり、結びついている。私たちが自己の責任をとれる年齢に達してから結婚するまでの間に経験する事柄、また私たちの受ける勧告や指導の数々、これらはすべてこの世で結婚生活に入るための備えをさせるものである。そして、その結婚はそれに伴う誓約を守る時に、永遠

に続くものとなるのである。したがって、私たちが今後残りの生涯でなすことはすべて、どのような事柄もみな、私たちが今歩んでいる日の光栄の結婚制度に結びつくものであり、私たちが聖なる宮居で交わした誓約を守るように励ます目的を持っている。一言で言って、これが基本的な私たちの考えであり、私たちは今、その考えの下にこの世の生活を営んで

いるのである。

ここで結婚だけでなく、すべての事柄に当てはまる結婚の基本概念を、末日の啓示の中から引用してみよう。教義と聖約には次のように記されている。

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うるために定められたる律法と条件を創世の前より定められたるまま

に守らざるべからず。」(教義と聖約132:5)

これこそ、あらゆる時代の人間の行動を支配する基本的で、最も重要な原則である。だれも労なくして益を得ることはできない。私たちは復活という祝福を無償で得る。しかしある意味で、それは、私たちが前世でそれに値する正しい生活をしてきたからである。私たちはこの試しの生涯を送った後に復活する



ブルース・R・マッコンキー

という権利を努力して得たのである。決して何もせず^ににいただいたわけではない。永遠の世界には、努力なしに何かが得られるという考えは存在しないのである。律法を守ってこそ祝福は得られるのである。主は、そのことを次のような言葉で述べておられる。

「この新しく且つ永遠の誓約に就きては、こはわが最高完全なる光栄のために定められたるものにして、わが最高完全の光栄を受くる者はこの律法を守らざるべからず、またこれを守るものとす。然らずば、その者の行き止りなるべし。」(教義と聖約132:6)

「新しく且つ永遠の誓約」とは、完全な福音のことであり、福音は主が人間と交わされた救いに関する誓約である。それが「新しき」と言われるのは、この末の世に再び新たに啓示されたからである。そして、それが「永遠」

であるのは、この地球上だけでなく、天父の子供たちが住むすべての地球上の忠実な人々にいつも与えられてきたからである。次の第7節には、福音のすべての律法がその短い一文の中に包括されている。その言葉は、それに関連する用語や条件のゆえに、必然的に法律的な言い回しになっている。

「われ誠に汝らに告ぐ、この律法に属ける条件は次の如し。(この聖句は啓示された宗教の全分野に及ぶ律法の条件を述べているが、ここではそれを現在のテーマとして取上げている結婚に絞ることにする)すなわち、一切の誓約、契約、約束、義務、宣誓、誓言、履行、関係、交際または予約にして、為されまたは結ばるるとき、聖任されしものによりて為されず、また今も永世にも亘りて結び固むる権能を保有するためにこの世に於てわが聖

任したる者の^{なかだ}嫌ちを通じて啓示と誠命とによりて為されず、また『約束の聖きみたま』によりて今も永世にも亘りて結び固められずば、すなわちまたこれら^い最と聖くあらずば、死にし者より復活する時もその後にも何ら^{こうけんこう}効験効能または効力あることなし。而して、この権能を保つようわれがこの世に於て聖職に任命したる者とは（われはこれをわが僕ジョセフに任命して末の世に於てこの権能を保有せしむ、而も、この権能とこの神権の鍵とを授与さる者はこの世に於て一代唯一人のほかにあることなし）。以上の事然るは、以上の目的を以て結ばれざる一切の誓約は人の死を以て終りを告ぐればなり。」（教義と聖約132：7）

このことから何がわかるであろうか。この世に住む私たちには、ふたりの間で自らの選びによって社会的にも正統と認められる取り決めを交わす力がある。そして、ふたりにその意思がある限り、その関係は死がふたりを分かつまで続く。しかし、死すべき体を有する私たちには、死後もふたりを結び付けておく力はない。私たちはだれも、次の世界での行動までも契約することはできないのである。神が今、この世で私たちに与えられた自由意志は、この死すべき世界に限られたものである。

私たちは死すべき人間であり、この世は時間の制約の伴う世界である。そこで、もし私たちがこの死の淵に橋を渡し、霊界にまで通じ、さらに復活の時にも感化を及ぼすことを行ないたいならば、人間の能力を超越した力にすぎない。その力が神の力である。人間は死すべき存在であり、その行ないはこの死すべき世に限られたものである。他方、神は永遠であり、そのみ業には終わりが無い。

主はこの地上で結び、天においても永遠に結び固める権能を持っておられ、ペテロに神の王国の鍵を授けたもうた。さらに主は、ヤコブとヨハネ、また古代の十二使徒全員に同じ権能を授けたもうた。そして、古代にあった権能が今日再び私たちに回復されたのである。主はこの時代に、使徒と予言者を召し、彼らに神の王国の鍵を授けたもうた。それによって、この地上で結び、天においても永遠に結び固める権能が再びこの世の人に与えられたのである。主はまずエライジャを遣わし、結び固めの権能を回復し、続いてエライヤスを通してジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにアブラハムの福音を授けたもうた。そして彼らと、その子孫が代々にわたって祝福を受けると約束された。

エライジャもエライヤスも、全能なる神の権威と権能を持ってやって来た。そして再びこの地上の人間にその鍵と権能、特権、権利を回復したのである。私たちはこの栄えある出来事を神に感謝せずにはおられない。このようにしてこの地上に、この地上で結び、天においても永遠に結び固める権威を持つ人々が存在するようになった。私たちには、結婚を執り行なう権能が与えられている。私たちが結婚を執り行なう時、男女はこの世で夫婦となり、もし彼らがそこで交わした誓約を守り続けるならば、霊界においても夫婦として過ごすことができるのである。そればかりではない。復活の時には、栄光と統治の冠を受けて出て来たり、昇栄を受け、王国を受け継ぐ者となるのである。こうしてその夫婦は永遠の生命を享受する。それを達成できるのはこの教会である。全能なる主が結び固めの権能を授けられたのは、この教会のみである。

私たちの手の届くところにそれはあるのである。

福音のすべての律法を包括するこの聖句(教義と聖約132:7)から、3つの条件を読み取ることができる。永遠に効力を有するバプテスマを受けようと考えている人は、まず第1に、正しいバプテスマの執行される所を知らなければならない。第2に、その儀式を執行する正当な執行者が必要である。第3に、その儀式は聖きみたまの力によって結び固められなければならない。その時初めて、悔い改めた人はそのバプテスマによって日の光栄の王国に入ることを許されるのである。約束の聖きみたまによって結び固められなければならないというこのことは、あらゆる儀式、あらゆる誓約、教会にかかわるすべての事柄について言える。私たちはこの原則、この考え方、そしてその力が万事に及ぶことを理解するまで、結婚と約束の聖きみたまについて論じ合うことはできないのである。

啓示のひとつに次のような言葉がある。「御父が正しく且つ真実なる者に皆注ぎたまう約束の聖き『みたま』によりて結び固めらる。」(教義と聖約76:53) その意味は、正しく生活し、最善を尽くし、世に打ち勝ち、肉欲を制し、正義の道を歩む人は皆、その行ないを聖きみたまによって結び固められ、承認されるということである。パウロの言葉を借りれば、「霊によって……きよめられ、義と」されるのである。(Iコリント6:11参照) 1週間、数カ月、あるいは死がふたりを分かつまでの短い結婚生活を望む人は、人の力によって制限付きの結婚をすることができる。主が与えて下さった自由意志によって、人はそれを行なえるのである。しかし、もし次の世でも妻

と共に暮らしたいと思うならば、この地上だけでなく、天においても結び固める権能を持った人を捜さなければならない。

正当に結婚をするために、人は次のことを行なう必要がある。第1に、日の光栄の結婚を求め、正しい儀式が受けられる所を捜す。第2に、結び固めの権能を有する正当な執行者を捜す。この結び固めの権能は、百分の一と教会員の犠牲によって建てられた神殿の中でのみ行使することのできる権能である。第3に、義しく、正直に、誠実に、徳高く、清く生活することである。そうすれば、神の聖きみたまの承認を得て、約束の聖きみたまによって今も永世にも結び固められるのである。

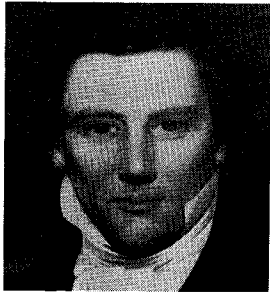
私たち末日聖徒は神殿に参入するための推薦状を受けるにふさわしい者となるように努力しなければならない。みたまは汚れた体には住みたまわらないからである。私たちは努めて、自分の体を清く保ち、気高い者となり、みたまを伴侶とすることができるようにならなければならない。私たちがそのような状態になる時、監督とステーク部長は私たちに神殿に参入する推薦状を発行して下さいであろう。神殿で私たちは、神聖かつ厳かな誓約を交わす。そして、引き続きみたまの光の下で、交わした誓約を破ることがないように全力を尽くす。もしそのような生活を送ることができれば、私たちに永遠の生命が保証される。恐れおののくことは何ひとつない。もし私たちが最善を尽くして努力しているならば、憂い、心配することは何もないのである。言うまでもなく、私たちはまだ完全ではないし、すべての問題を克服する力もない。しかし、私たちの思いを正しくし、これまで私が述べてきたような態度で永遠の生命をみざし

て歩み続ける限り、私たちの結婚生活は来るべき王国でも続くはずである。私たちは神のパラダイスに入っても、夫であり妻であり、復活しても夫婦の関係を維持してゆくことができるのである。

復活の時に、夫婦としてよみがえった人は皆、永遠の生命を必ず得ると保証された人々である。しかし、その時点ですべてを受け継ぎ、すべてを所有するわけではない。私たちは死後も、また復活後も著しい進歩を遂げる。

人はすべての事柄を知り、天父なる神のようになるまで、すなわち永遠の生命を受け継ぐ者となるまで、学び、備え続けるのである。

現代風の言葉でいえば、たとえ神殿で結婚した家族であっても、それは見習い家族なのである。なぜならば、それで将来がはっきり定まったわけではないからである。それは、私たちが交わした誓約の規定、条項、条件を守り続けるかどうかで決定される。神殿で結婚する時、私たちは自分の妻を完全に愛せる



ジョセフ・スミス

よになれる立場に自分を置くのである。この完全な愛は、永遠の誓約に伴う完き栄光を得たいと思うならば、決して欠かせないものである。これは、妻にとってもまったく同じことが言える。また両親には、子供たちを光明と真理の中で育て、永遠の家族の一員となれるように子供たちを訓練し、備えさせる責任がある。一方、子供たちには両親を敬う義務がある。このようにして、永遠の絆を保つために必要な事柄が代々受け継がれていくのである。そして、最終的に、アダムから始まって、この地上に生を受ける最後の人間に至るまでの、昇栄を得た人々の大きな鎖が完成する。しかし、その定められた血統を受け継ぎ、保持するにふさわしい資格を得ることの

できなかった人々は、その鎖の輪に入ることができないのである。

私が今述べているのは、律法に従って生活する機会を得た人々のことである。その機会が与えられている人は、そうする必要がある。それが神の命令である。しかし、その機会に恵まれず、しかももし律法を与えられていたらそれに従って生活したに違いない人々もいる。そのような人々は、彼らの心の思いと願いに従い、慈悲深い神の摂理と哀れみによって裁かれるはずである。これが死者に対する救いと昇栄の原則である。私はそのことをはっきりと知っている。

これまでの話は総論的なことばかりであるが、私は意識して具体的なことに触れないよ

うに努めてきた。かつて予言者ジョセフ・スミスが、「私は人々に正しい原則を教えて、人々に自らを治めさせる」と語ったように、私は、正しい原則を示すことに主眼を置いてきたからである。それは、取りも直さず、一般的な概念さえ明らかにしておけば、あとは各人が約束された報いを得るよう自分の道を選択して下さるのではないかという願いもあつてのことである。

思うに、人々の心を引き付ける最も崇高な考えは、家族が永遠であるということであろう。これは、人が知り得る最も栄えある考えであると思う。もちろん、その家庭は主イエス・キリストの贖いの犠牲を基として築かれたものでなければならない。日の光栄の結婚は、御父の王国において永遠の生命を得るための扉を開くものである。私たちが家庭で経験する様々な試しや問題を一つ一つ克服してゆくならば、主からいつかこう言われる時が来るであろう。「良い忠実な僕よ、よくやった。……主人と一緒に喜んでくれ」(マタイ25:21)と。

私がこれまで述べてきたことはすべて真実である。それは、私たちが現在いただいている啓示を基としたこの教会と結びついた、栄光、驚き、美のすべてである。啓示を基としたこの教会と結びついた事柄の中には、単にそれが真実であるということ以上の栄えある

事実が隠されている。そして、それが真実であるので、私たちが教える教義も真実である。また、教義が真実であるので、私たちはこの世において平安と喜びと幸福が得られる。さらに、世の苦役や邪悪を追放する力が与えられるのである。また私たちは、キリストに頼り、純粋な宗教のもつ栄光と美を求め、聖霊によって新たに生まれる力を授けられる。このように真実の、しかも永遠の真理を基として築かれた教会の会員であること自体、素晴らしいことである。

このみ業が真実であり、神のみ業であるという私の証によって、皆さんの心の思いが鼓舞されるように願っている。神は今日、人々に語りかけておられる。イエスは主であり、イエスは無限無窮の贖いの犠牲を捧げられた御方である。主はこの末日に神の王国を打ち建てたもうた。今日、スペンサー・W・キンボール大管長が予言者、啓示を受ける者として、また全能なる神のこの地上における代弁者として召されていることを証する。この教会は、まだまだ力も弱く、会員数も少ない。しかし、やがて教会は発展して、水が海を覆っているように、神を知る知識が地に満ちることだろう。私たちの究極の目的は、教会を全地に満たすことである。なぜなら、私たちの教会は永遠の真理の堅固な基の上に築き上げられた教会だからである。

私は人々に正しい原則を教えて
人々に自らを治めさせる

ジョセフ・スミス

暴徒によりミズーリ州北部から追放された末日聖徒にとって、1839年は新時代への幕開けの年であった。彼らは前年の10月に起こったハウズミルの大虐殺を容易に忘れることはできなかった。その上、知事から出された撲滅令によって、聖徒たちは家や財産を奪われ、ひどい仕打ちを受けた。こうしてミシシッピ川を渡り、イリノイ州へ逃れたその年の冬は、教会歴史における新しい時代の訪れを意味していた。予言者ジョセフ・スミスはすでに社会的な地位においてその頂点に達していた。しかし同時にこのノーヴー時代は悲劇の極点でもあった。

1月には7名の委員から成る移住者配置委員会が組織され、ファーウェストからの移住者の指導が行なわれるようになった。脱出者の中にはボートでミズーリ川沿いにセントルイスまで逃れた人々もいた。しかし、聖徒たちの大半は、約250キロの道のりを、馬車や手押し車で東の州境まで逃れた。そのような一行の中にリーバイ・ハンコック一家があった。彼らは、手製の馬車にとうもろこしを積み込んで、ファーウェストを発ち、十分な衣類も毛布もなく、家財も捨て、深い雪の中を旅した。食物と言えは焼いたとうもろこししかなく、ほかに木の皮や草を食べ、暗くなれば夜

ノーヴーへの集合

1839—45年

グレン・M・レオナード



空の下で寝るといった苦しい旅を続けながら、一家は1月のある朝、一面に凍りついたミシシッピ川を渡った。ハンコック一家も、ほかの聖徒たちと同じようにクインシーの町に避難した。好意的なクインシーの市民は歓迎委員会をつくって、救援物資を供給してくれた。

しかし聖徒たちはクインシーに長くとどまることはできなかった。聖徒の中には、ここにとどまることを心配する者もあったが、ブリガム・ヤングは入植地を開拓してそこに定着することを提案した。それに、ジョセフ・スミスもリバティーの牢獄から聖徒たちに、安全な地を見付けるようにと忠告してきた。そこで、中心になる地を選ぶ委員会が組織され、丁度ミズーリ川が湾曲した所にあるコマースという地が選ばれた。その春ジョセフ・スミスが聖徒たちのもとに到着し、その地をノーヴーと名づけた。対岸のアイオワ州リー郡の地も買い入れ、聖徒たちはそこにゼラヘムラという居住地を築いた。

ノーヴーは湿地で、生活には不向きであった。聖徒たちは入植するやマラリヤに襲われた。「実に陰気な毎日でした。ジョセフはコマースの自宅を病人に提供し、自分は庭にテントを張ってそこで寝起きしていました」と、ウイルフォード・ウッドラフは述べている。この苦難の最中、予言者は川の兩岸に横たわっている病人を見舞い神権の力によって大勢の人々を癒した。

夏になると、マラリヤはますます猛威を奮い、死ぬ者が続出した。1841年にシドニー・リグドンは病死した聖徒たちのための「弔辞」の中で、ひとつの勧告を与えた。聖徒たちはその勧告に従い、この恐ろしい病気をくい止めるために緊急に湿地の排水作業を開始した

のであった。

1840年には、新しい末日聖徒の入植者たちがノーヴーに到着した。英国の聖徒たち40名から成る一行は、6月6日にリバプールを発った。彼らはヨーロッパから渡ってきた最初の聖徒たちで、その後5,000人近くの英国の聖徒たちが、ノーヴーに続々と移り住むことになった。

彼らが英国から移ってきたのは、1838年6月の啓示によってヨーロッパで福音を伝えるよう召された十二使徒評議員会の伝道が実を結んだことを証明するものである。啓示を受けてから2カ月後、ブリガム・ヤングをはじめ、ヒーバー・C・キンボール、パーレー・P・プラット、オルソン・プラット、ジョン・E・ページ、ジョン・テイラー、ウイルフォード・ウッドラフ、ジョージ・A・スミスの8人の使徒が伝道に赴いた。その中には重病の者もいたが、彼らは皆主からの召しに答えて、家族を貧困の中に残して旅立って行ったのであった。

英国に最初に上陸したのは、ジョン・テイラーとウイルフォード・ウッドラフ長老であった。彼らは1840年1月11日にリバプールに下り立つと、直ちに伝道を開始した。ウッドラフ長老は教会歴史上最もすぐれた宣教師のひとりに数えられている。彼はまず友人の助けを得て、スタフォードシャー・ポテリーズで福音を伝えた。その時特に力を貸してくれた友人がウィリアム・ベンボー氏であった。彼は、ヘレフォードシャーで大農場を営んでいる兄弟のジョン・ベンボー氏が、ユナイテッド・ブレザレン（一致兄弟派）に加わって古代の福音を研究していると話してくれた。3月初めの日記に、ウッドラフ長老は「主が

私に南に行くよう望んでおられる」と記している。彼はすぐにジョン・ベンボー氏の農場へと旅立ち、彼の家族をはじめ、話を聴きたいという数百名の人々に福音を説いた。その結果、この地域だけで1カ月に158名もの方がバプテスマを受けた。

ほかの宣教師たちも同じように成功を取めた。英国の会員数は1840年1月に1,500名となり、さらに、5カ月後使徒たちが合衆国に引き上げる時には、その数は5,814名に達していた。使徒たちは福音を伝えることのほかに、モルモン経と讃美歌集を出版し、月刊誌「ミレニアル・スター」を発刊した。この雑誌の出版は、英国の聖徒たちの中で130年間続いた。

英国における使徒たちの重要な務めのひとつは、移住を促すことであった。彼らは移住の手続きを整え、富める人々に困っている人を援助することを勧めた。1840年の初頭、聖徒たちは自国にとどまりそこで教会を建てるようにという勧告が出される時まで、およそ51,000名のヨーロッパの聖徒たちが、教会の本部を目指して大西洋を横断した。その中には英国からの聖徒が38,000名も含まれていた。

ノーヴー時代の伝道活動は、英国、カナダ南東部、合衆国を中心に行なわれたが、そのほかオーストラリアやインド、ジャマイカ、南米、ドイツなどにも伝道の働きかけが開始された。しかし、これらの地域での伝道活動は、改宗者が散在していたため、思うように進展せず、十分な活動は次の時代にまで持ち越されることになった。

最も話題を集めた召しは、1840年4月の大会でオルソン・ハイド長老に与えられた、ユダヤ人の集合のためにパレスチナを奉獻する

という召しである。1841年10月24日日曜日の朝に、ハイド長老はエルサレムを奉獻する祈りを捧げ、その不毛の地をユダヤ人集合の地として下さるよう主に嘆願した。また、エルサレムの再建、ユダヤ人国家の建設、神殿の建立についても祈った。

イリノイ州の片田舎に到着した英国の聖徒たちは、そこが経済の自立を可能とする土地であることを知った。そのためにはまず熱心に働かなければならなかった。しかし途中で挫折したり、病気になったりする者も少なくなかった。それでも、末日聖徒の移住者たちは、イリノイ州のハンコック郡やその周囲の地域、さらに川向こうのアイオワ州へと広がっていった。このようにして、ノーヴーは聖徒の集合地の中心地となった。

ジョセフ・スミスは、イリノイ州政府に対して、ノーヴーに市体制を確立して聖徒たちを組織し、大学を建て、市民軍を組織する憲章を認可してほしいと申請を出した。ノーヴー市体制は、イリノイ州内の認可された他の市と同じものであった。1841年2月、イリノイ州の前市民軍指揮官であったジョン・C・ベネット氏が教会に改宗し、初代市長となった。そして、このベネット市長の努力によって、聖徒たちは憲章の認可を受け、ノーヴー軍団は3,000人を有する活発な軍隊となったのである。これは自衛のほかに、国家と国民に対するモルモンの忠誠心と愛国心を示すものであった。ベネット兄弟を総長としたノーヴー市立大学は、校舎を持つまでには至らなかったが、幾度となく講義が開かれ、オルソン・プラットやオルソン・スペンサー、シドニー・リグドンなど、長老たちが教えた。また、この大学は公立の小学校をも管理した。

ノーヴーは人口1万を有する豊かな市へと成長し、その大きさはシカゴに匹敵するほどであった。ノーヴー市の経済はその大半を建築業と農業に依存していた。住民は工業と商業を發展させることを望んでいたが、ほとんどの人は、土地の売買、家の建築、そのほか小さい店を営む程度の仕事で生計を立てていた。市営の製材所やれんが工場、大工用具店、工務店などもあった。1842年になると、これまでの丸太の家屋に代わって立派なれんが造りの家が建ち始めた。これらの建物は、末日



聖徒が常に向上心を持っていたことの証拠であり、現在でも残っている。

ノーヴーの發展の中で教会にとって最も重要なことは、教会の組織と教義が確立されたことである。聖徒たちがノーヴーの周辺に住みつき、物質的、靈的な必要が生じてくると、それを満たすためにステーキ部が徐々に組織された。ステーキ部を小さく区分したワード部という組織が初めてできたのも、この時期である。これは監督が財政面または福祉面で管理しやすいように便宜上設けられたものであり、ワード部として完全な働きを始めたのは、1840年代の後半、ユタ州に入植してからのことである。

教会政体において重要なことが、1841年8

月16日、ジョセフ・スミスより発表された。それは、ステーキ部内の教会諸事の管理権を十二使徒評議員会に託すというものである。十二使徒評議員会にはすでに伝道部を管理する資格は与えられていたが、ここで改めて予言者は「十二使徒が大管長会に次ぐ地位に就くべき時が来た」(*History of the Church*「教会歴史」4:403)と述べたのである。責任の拡大に伴い、十二使徒はノーヴーに到着する移住者たちの定住を援助したり、教会や公共活動の指導に当たったりした。また、宣教師の召しの発布や「タイムズ・アンド・シーズズ」誌(1839年ノーヴーで創刊)の発行に携わったり、宗教上の諸事の決定に関与したりした。

ノーヴーにおける教会活動は、おもに日曜日の朝の礼拝行事を中心として行なわれた。晴れた日には午前10時になると神殿用地を、見下ろす丘の斜面で集会が開かれた。その会ではおもにジョセフ・スミスが説教をした。ジョセフ・スミスは、そのほか様々な集会の中で聖典の解説をし、神会の属性、人の永遠の属性、神の人との関係など、数々の大切な福音の教えを説いた。これらはすべて死者の救いに関する教えの一環をなすものであり、予言者はこの時に初めて死者の救いのことを聖徒たちに明らかにしたのであった。

死者のためのバプテスマは、1840年9月から1年以上にわたってミシシッピ川で行なわれた。しかし、後にノーヴー神殿が完成し、1841年11月に献堂されてからは、地下のバプテスマフロントが使われるようになった。エンダウメントや永遠の結婚など、その他の神殿儀式は、神殿が完成するまで、ジョセフ・スミスの店の2階の一室で執行された。エン

ダウメントの儀式は、予言者によって1842年5月に一部の聖徒たちに紹介された。そして聖徒たちは、ふさわしい者すべてがこれらの祝福にあずかれるようにと、神殿を完成させるために所持金や時間を提供したのであった。その結果、エンダウメントの儀式は、ノーヴ一神殿がほぼ完成した1845年12月11日から神殿で執行されるようになった。この聖なる儀式は、1846年初頭に聖徒たちがノーヴ一を追放されるまで続けられ、5,000人以上の会員がその恵みにあずかった。

ジョセフ・スミスは前から結婚に関する啓示を受けていたが、1843年7月12日になって初めてこのことを記し、神権の権能によって結び固めが執行された。この啓示の中で、多妻結婚が神権の管理の下に許されるのはどのような場合かについても説明されている。予言者はこの教えが論議的になることを恐れて、当初自分の身近にいるごく一部の人々にしかこの教えを知らせなかった。しかし、史実をひもといてみると、ジョセフ・スミスはこの教えをカートランドで聖書の霊感訳に取りかかった1831年の頃から理解していたことがわかる。そして、十二使徒たちが英国からもどると、予言者は彼らにこの教義について話した。しかしこれは使徒たちにとっても受け入れ難い教えであった。けれども、幾人かはその教えに従って、ノーヴ一で他の女性と夫婦の結び固めを受けた。この儀式は1852年まで公にされずに行なわれききたが、この年オルソン・ブラット長老は多妻結婚に関する初めての説教を一般に向けて行ない、これが永遠の結婚という神聖な原則の一部であることを説明したのである。こうして多妻結婚は、1890年ウイルフォード・ウッドラフ大管長が

啓示を受け、多妻結婚廃止の公式宣言を発表するまで続けられた。

多妻結婚が行なわれているというわさがノーヴ一に流れた時、教会に不信を抱く者が続出した。彼らは、教会の指導者が姦淫の罪を犯していると非難したが、ジョセフ・スミスはそれをきっぱりと否定した。現に、教会の教えは19世紀の一般社会に見られた状態よりも高い地位に女性を置いていた。聖徒たちがこの教義を受け入れたのは、ほかでもない多妻結婚は天より認められた宗教上の原則であり、すべての会員に道徳的に清い生活を送ることを強調した原則であるという確信があったからである。

教会の女性たちは、世の道徳を正し、社会の徳を高めるようにと勧められた。これは1842年3月17日にノーヴ一において扶助協会が組織された時、ジョセフ・スミスが女性たちに課した特別な責任のひとつである。扶助協会の創立に当たって、ジョセフ・スミスは姉妹たちにこう勧告している。「貧しい人々の世話をし、愛する相手を捜して愛を施し、人人の必要を満たすことによって、兄弟たちが良い働きのできるようにしなさい。」(議事録、1842年3月17日)エマ・スミスを会長とする扶助協会は、まず社会を築く事柄に精出すことを決めた。そして、神殿建設に従事する人人のシャツを縫うことから始めた。この愛ある奉仕活動に参加した扶助協会会員は、ノーヴ一で1,300名を越えた。この組織は1844年に至るまで定期的に集会を開き、ソルトレーク盆地に入ってから貧しい人々を助け、社会における女性の様々な役割に秀でるという新たな決意を持って運営された。

ノーヴ一における宗教上ならびに経済上の

発展によって、聖徒たちに明るい未来への希望が芽生えてくると共に、政治的な変革も進み、やがてイリノイ州西部の人々とも親しく交流できるようになってきた。ジョセフ・スミスをはじめ他の指導者たちは、地域の政策にも積極的に参加していた。それは、末日聖徒の利益を守り、できることならミズーリ州で味わったような法律上の問題を回避するためであった。1842年には、ノーヴーにおける末日聖徒の数はハンコック郡の中で最大となり、隣接するアダムス郡の政策にも影響を及ぼすほどになった。

このような末日聖徒の政治力は、古くからの住民に、自分たちの政治に対する権利を奪うものであるという恐れを抱かせる結果となった。そして選挙になると、末日聖徒の投票によって、ウィグス党と民主党の均衡を失わせることとなった。このような情勢に対抗して、モルモンでない人々は結束して反モルモン主義を唱える組織を作り、モルモンが支持する立候補者を攻撃した。トマス・シャープ社の新聞「ワースウ・シグナル」には、反モルモン勢力による敵意のある記事が掲載された。民主党がモルモンの支持を得てイリノイ州の与党になった時など、ウィグス党は機関紙を使ってモルモンを公然と非難したほどである。また1842年に、予言者の弟ウィリアム・スミスがイリノイ州下院議員の議席をねらってシャープと争い、これに勝った時、シャープ側は新聞の論説で、イリノイ州のモルモンの根絶を訴えた。

同じ頃、ミズーリ州政府はジョセフ・スミスとほかに5名を、逃亡者として引き渡すよう要求してきた。ファーウェストにいた時に告訴された古い罪を蒸し返してきたのである。

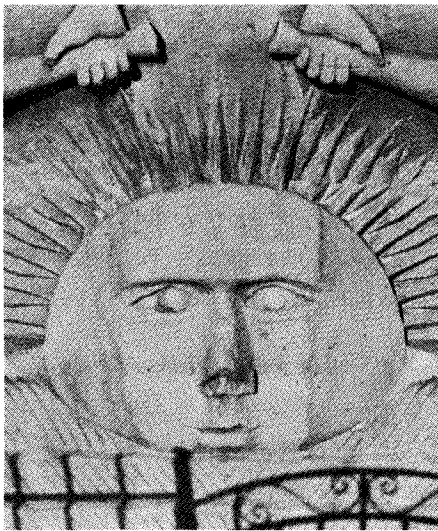
しかも、1842年5月にミズーリ州知事リバーン・W・ボッグズの暗殺未遂事件が発生し、その従犯の罪でジョセフ・スミスが訴えられた。イリノイの新聞は、予言者が暗殺を1年前から予告していたと、非難の声を浴びせた。しかし、ジョセフ・スミスはそのような事実のないことを直ちに言明した。

予言者に対するこのようないやがらせの主犯は、ノーヴーの初代市長であり大学総長であり、ノーヴー軍団の指揮官であったジョン・C・ベネットであった。1842年5月に、予言者ジョセフ・スミスは、ベネットがノーヴー軍団の実習の際自分を殺させようと画策していたことを知った。しかし予言者ジョセフ・スミスの護衛のために計画の裏をかかれたベネットは、10日後に市長を辞職した。さらに翌月、ベネットは不道徳な行ないをしたことを告白し、教会から破門された。破門されたベネットは、ノーヴーを去り、偽りの記事を書き立てた上、モルモンの指導者たちを脅迫と不動産売買の詐欺、不道徳、政治的陰謀のかどで告訴したのである。このような中傷記事がもととなり、各地でモルモンに対する非難の声があがった。そこで教会の指導者たちは事の次第を発表し、周囲の地域に特別な宣教師を派遣してこの誤報の訂正に当たった。

脅迫は後を絶たなかった。その中にあって予言者は、聖徒たちと自分自身を守るすべはないものかいつも頭を悩ましていた。ジョセフ・スミスが集合地の拡張を考え、合衆国への移住を勧めたのはこの時期のことである。そして1842年、彼は避難所としてロッキー山中を選ぼうとしていた。翌年8月には、アイオワ準州西部の情勢を探るために、少数の探検隊を送っている。1884年2月には、カリフ

オルニアにも探検隊を派遣することを計画し、テキサス南西部の入植を進めることも考えていた。

テキサス入植計画を進めるに当たって、予言者ジョセフ・スミスは総評議会または五十人評議会として知られている「王国の市政部」を組織した。この組織は、大管長会および十二使徒評議員会に課せられている数々の俗事に関する責任を軽減するために設けられた50名の委員から成る委員会であり、モルモンの



ノーヴー神殿の太陽の石

市民権の確保、適切な居住地の手配などについて議会に働きかけを行なう機関である。

五十人評議会は、1844年の合衆国大統領の候補者としてジョセフ・スミスを推し、選挙運動を開始した。ジョセフ・スミスは立候補に当たって、ふたつの政党の考え方を採り入れたものを政策綱領として表明した。その上、ジョセフ・スミスは政治を超越した大統領になることを選挙人に訴えたいと思っていた。そこで、ウィリアム・W・フェルプスの助け

を借りて、「合衆国政府の力と政策」と題したパンフレットに、自分の考えを著わした。

ジョセフ・スミスは教会の援助を受けずに一市民として選挙運動を始めたが、後に教会がこれを支援する形となった。4月の総大会の際に、話し手たちが立候補者を応援したことによって、300名の人々が選挙運動の援助を申し出たほどである。第一副管長のシドニー・リグドンは、国民改新党公認の副大統領候補に指名された。この政党は1844年7月中旬に、メリーランドのボルチモアで党大会を開く予定であったが、結局集会は一度も開かれなかった。不満を抱くジョン・C・ベネットとその仲間が、予言者に反対するイリノイ州の人々と手を結び、ジョセフ・スミスの政治的、宗教的な避難口までもふさいだため、ジョセフの力は、殉教までのごくわずかの期間しか発揮されなかった。

1844年6月7日、数人の背教者を含む反対派の一団が、「ノーヴー・エクスボジター」の初刊を発行した。この新聞の中で彼らは、ジョセフ・スミスを墮落した予言者、扇動政治家、不道德のやくぎ者、経済陰謀家であると非難した。また、モルモニズムはこのような活動を提唱するものであると攻撃しただけでなく、そのほかの人々についても中傷の記事を書き立てた。紙面で攻撃された人々の中には、新市長のジョセフ・スミスを始め、ノーヴー市議会議員も何人かいた。市議会は討議を重ねた末、この中傷新聞を公的不法妨害法に抵触すると結論づけた。そして、反モルモン勢力が立ち上がらないうちに、この新聞社をおさえようと、市の警察当局は印刷機や活字を壊し、用紙をすべて焼却した。

ところが、新聞社の社長は、(紙の焼却は整

然と行なわれたにもかかわらず)市が暴動を挑発したとして市議会を告発したのである。こうして、市議会議員は捕えられ、結局無罪にしかならない裁判の手続きを踏むことになった。ところが、この裁判が終了しないうちに、反モルモン系の新聞は一斉にジョセフ・スミスがノーヴー軍団を動員して市に戒厳令を敷いたと、新聞に書き立てた。イリノイ州知事トマス・フォードはこの事件を耳にし、ひそかに実情を探らせた。そして、双方とも法を守り、暴力事件を起こさないという約束をとりつけた。フォード知事はイリノイ州の郡庁所在地カーセージに向かい、両者間の仲裁を買って出た結果、裁判が最善の解決策であると結論を下した。

6月25日、暴動の罪を着せられた15名が、カーセージでの裁判に出廷し、治安判事によって疑惑の縄目が解き放たれたのだ。ところがその日遅く、ジョセフとハイラムはノーヴーの法律に背いたということで再び捕えられた。そしてふたりは事情聴取も受けずに、カーセージの牢獄へ送られた。ジョン・テイラー、ウイラード・リチャーズたちも一緒に投獄された。

6月26日、フォード知事は獄中の予言者を訪れ、市議会の取った処置と軍団の動員は法律的にも妥当な行動であることを確認した。フォード知事は、牢獄の護衛のために、反モルモンのカーセージ連隊(地元の軍団)を2隊残して帰った。彼はノーヴーを訪れる際には予言者たちと一緒に連れて帰ると約束していたにもかかわらず、この約束を破り、6月27日の朝、単独でノーヴーに向かった。

そしてその日、顔を黒く塗った男たちの集団が、カーセージの牢獄になだれ込んできた。彼らは獄の看守と素早く話をつけた。看守と

言っても自分たちと同じ仲間の者であり、彼らは弾丸の入っていない銃を持って、獄の護衛に当たる手はずになっていたのである。暴徒たちは2階に駆け登り、看守の寝室の前に立った。そこに末日聖徒の指導者たちがいたからである。うすい寝室のドアから弾丸が撃ち込まれた。最初に、ハイラム・スミスが致命傷を負って倒れた。ジョン・テイラーもドアから撃ち込まれた弾丸と窓からの弾丸を受け、大けがをしてベッドの下に転がり込んだ。ジョセフ・スミスは窓に走り寄ったところを、開かれたドアから撃ち込まれた2発の弾丸と、窓の外から発せられたもう1発の弾丸に当たった。そして4発目を受けて、窓の外に落ちた。暴徒たちは予言者が死んだことを確かめようと、外に駆け出していった。そのため、ドアの影にいたウイラード・リチャーズは傷を負わずにすんだ。その時、モルモンが来たぞ、という声がした。事実そのようなことはなかったが、その声に暴徒たちは退散した。

暴徒たちは、予言者を殺せば、モルモンズムも終わりを告げるだろうと信じていた。しかし、教会員たちは、ジョセフ・スミスと大祝福師ハイラム・スミスの殉教は主の目的があってなされたものと考えていた。忠実な教会員は、予言者ジョセフ・スミスを通して回復された末日の業が必ず勝利を収める日が来ることをますます強く確信するようになった。ジョセフ・スミスは一介の名もない少年から身を起こして、国中に知れ渡る人となった。聖徒たちはこの名前が、モロナイが約束しているように、世界の隅々にまで行き渡ることを信じていた。そして彼らは、やっと始まったばかりの神聖な使命を果たすためにさらに業を推し進めることにしたのである。

教会および世界史年表

教会

世界

1832 大管長会組織される。

1833 ミズーリ州ジャクソン郡を追われる。

1835 十二使徒評議会および七十人第一定員会組織される。

1836 カートランド神殿献堂（キリスト、モーセ、エライヤス、エライジャ現われる）

1837 初めて英国へ宣教師を派遣。

1839 イリノイ州ノーヴーへ移住

1839 阿片戦争

1842

1841 オルソン・ハイド、パレスチナをユダヤ人集合の地として奉獻。

1842 扶助協会設立される

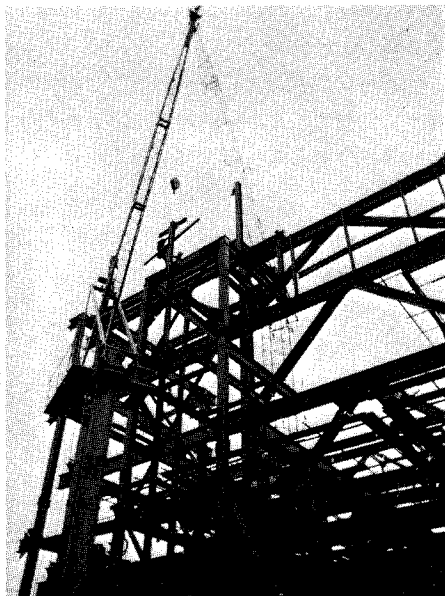
1844 ジョセフ・スミスおよびハイラム・スミス殉教

1844 電報開通

着々、工事の進む東京神殿

建設中の東京神殿は現在、鉄骨がほとんど組み立てられ、全体の仕上がりの4割近い状況です。いよいよ外壁や内部の工事に移っていきませんが、来年6月の完成が待たれる毎日です。

なお、写真は3月14日現在のものです。



着々，工事の進む東京神殿

建設中の東京神殿は現在、鉄骨がほとんど組み立てられ、全体の仕上がり4割近い状況です。いよいよ外壁や内部の工事に移っていきますが、来年6月の完成が待たれる毎日です。

なお、写真は3月14日現在のものです。



